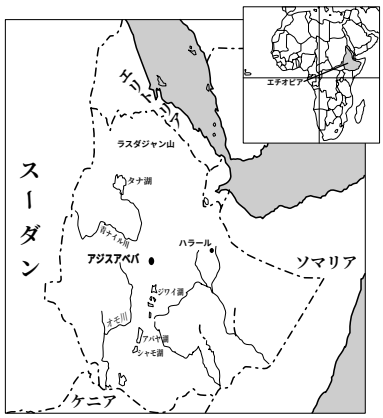
「ユニセフ子ども物語」

地球に生きる子どものくらし

Federal Democratic Republic of Ethiopia

エチオピア
連邦民主共和国



今日もハラールの町では、太陽の明るい光が家々の土壁を白く照らし、土ぼこりがきらきらと光っています。通りの向こうから聞こえてくる声にマモは耳を澄ましました。「今日はビタミンとポリオの日です。お子さんをクリニックに連れてきてください。」拡声器は繰り返しています。

「マモ、マァァモォ！」おかあさんの呼び声に、マモは駆け出しました。

「おかあさん、聞こえた？ビタミンの日だって。」

「聞こえたわよ。前に言ったでしょ。今日はクリニックで魔法のカプセルをもらえるの。さ、出かけるわよ。」マモは妹を抱いたおかあさんの後を追いかけました。魔法のカプセル！　なんてわくわくするんでしょう。

●●●●●

クリニックに行く途中、市場を通りました。色とりどりの果物や野菜を並べた店先にひときわオレンジ色がきれいな果物を見つけて、マモはつないだおかあさんの手をひっぱりました。「おかあさん、ぼくあれ知ってるよ。マンゴーでしょ。」

おかあさんは、立ち止まって答えます。「そうよ、よくわかったわね。あっちの黄色いのはパパイヤね。栄養がいっぱいよ。」

「食べてみたいなぁ。」マンゴーを手に取ろうとしたマモの手をおかあさんがぐいと引っ張りました。

「高いから買えないの。魔法のカプセルをもらえばマンゴーを食べなくても、元気になれるわよ。」

マモはマンゴーが食べたくてちょっと悲しくなりましたが、魔法のカプセルをもらえばきっとすごいことが起こるんだ、と思って歩き出しました。

●●●●●

クリニックに着くと、もうたくさんの子どもたちとおかあさんが集まっていました。みんなマモと同じ5歳までの子どもたちです。ともだちのアビやゼナシュも来ています。

みんなで並んで待っていると、列が動きだしました。建物の中に入ると、お医者さんや看護婦さんたちが子どもたちの口の中に何かを入れているのが見えました。

ひとり、ふたり…。とうとうマモの順番です。マモは看護婦さんの前に立ちました。

「これはポリオのワクチンよ。上を向いて口を開けてね。一滴、二滴…。はい、おしまい。」

冷たいものがマモの口の中に落ちました。味はよくわかりません。考える間もなく、次の看護婦さんの前に押し出されました。

「今度は魔法のカプセルよ。口に入ったら飲みこんでね。」

マモは、これだ、と思ってカプセルを見ようと目をこらしましたが、白く細長い形をしたカプセルはあっという間にマモの口の中に入ってしまい、ごっくん…、マモはそれを飲みこんでしまいました。

飲み込んで1秒、2秒、3秒…何も起こりません。

カプセルがよく見えなかったのと、魔法も何も起こらないことにがっかりしたのとで、突然マモの目から涙がこぼれてきました。看護婦さんもおかあさんもびっくりしています。「どうしたの。痛くなかったでしょう。」

「魔法なんて、起こんないよ。」しゃっくりをこらえながらマモが言うと、

「あらあら、魔法っていうのはね、マモ。」看護婦さんが話しはじめました。「これを飲めば、目が見えなくなったり、病気にかかってなおらなくなったりしなくなる、っていうことなのよ。このカプセルの中にはビタミンＡっていう栄養がつまっていてね、その魔法は目に見えないけど、マモをずぅっと守ってくれるの。」

マモは、まだひっくひっくしていましたが、看護婦さんもおかあさんもにこにこ笑っていたので、何だか安心してきました。

「そっか、それが魔法なんだね。」

●●●●●

帰り道、お母さんは、小さな苗木を抱えていました。

「おかあさん、それなぁに？」

「マンゴーの苗木よ。さっきもらったの。これを裏の畑のはしっこに植えさせてもらいましょう。大きくなればビタミンＡがいっぱいのおいしいマンゴーの実がなるわよ。」

「その木の世話、ぼくがやる。いいでしょう？」

マモはすっかりうれしくなって苗木をかかえて駆け出しました。高くのぼった太陽の光がマモを明るく包みこんでいました。

（文・構成：日本ユニセフ協会）

✳魔法の栄養✳

ビタミンA ～ビタミンA欠乏症とたたかう～

エチオピアのビタミンA欠乏症とユニセフの活動

©UNICEF /Mark Thomas

【国内の状況】

1996年にエチオピアではじめて行われた全国調査は、国内の65%の子どもがビタミンA欠乏症であることを伝え、衝撃を与えました。特にハラール東部地域の欠乏症の割合は92%と世界でも最高値を示していました。

この原因は貧困です。長年にわたって内戦と飢きんが繰り返されてきたエチオピアは1人あたりの年間収入が100米ドルと、世界でもっとも貧しい国のひとつです。多くの人びとはビタミンAの豊富なマンゴー・パパイヤなどの果物や、にんじん・ほうれんそうなどの野菜を買う余裕がありません。また牛乳や卵も一般の人びとの手が届くものではありません。

さらに近年、果物や野菜の代わりに、より多くの現金収入が得られるチャットと呼ばれる嗜好品（生の葉を口に含んでかむ。軽い興奮作用や発汗作用がある）が栽培されるようになったことが、ビタミンA不足に拍車をかけました。

©UNICEF /PIROZZI
市場に並ぶ人参やマンゴーも多くの人の手には届かない。

【ユニセフの対策とこれから】

ユニセフはエチオピア政府と協力し、1997年12月から5歳未満のすべての子どもを対象としてビタミンAの投与を開始しました。その後、ビタミンAのカプセルは「魔法のカプセル」として6ヶ月ごとに全国的なキャンペーンのもとに配布されるようになり、1998年12月にはポリオのワクチン投与と合わせてビタミンA欠乏症撲滅キャンペーンが大々的に実施されました。

この流れは確実に引き継がれ、1999年5月に実施されたキャンペーンでは5歳未満の子どもの74%にあたる500万人が「魔法のカプセル」を飲みました。12月のキャンペーンで、その数は600万人を超えただろうとユニセフは見込んでいます。

キャンペーンの効果は絶大です。今ではほとんどの子どもたちがビタミンA欠乏症を原因とする失明の危険を免れるようになり、子どもの死亡率も明らかに低下しています。

課題は出産前後の母親へのビタミンA投与です。ビタミンA欠乏の結果として注目される妊産婦の死亡率は10万人の出生に対し1400人と世界で3番目に高い割合となっています。出産前後6週間の間のビタミンA投与が重要とされていますが、6ヶ月ごとの支給の時期が出産前後6週間にあたる人は限られています。

また、ビタミンAのカプセル支給が中止されれば、これらの進歩はすぐに後戻りしてしまいます。持続的な問題解決のために、ユニセフは育苗所をつくり、果物や野菜の苗を地域の農家などに無料で配って栽培をすすめています。今後5年間に50万本の苗が配布される予定です。

また砂糖にビタミンAを添加した強化砂糖の導入も検討されています。エチオピアではお茶に砂糖を入れて飲む習慣があるため、ビタミンA欠乏症の根本的な解決方法として注目されています。

母親と子どもをむしばむビタミンA欠乏症

ビタミンA欠乏症は世界の1億人もの幼児を苦しめている重大な栄養不良のひとつです。ビタミンA不足は、以前から失明の直接的な原因となることが知られています。またヒトの免疫に欠かせないビタミンAが不足すると、病気に対する抵抗力が低下し、はしかや肺炎、下痢などによる死亡の危険を高めます。実際、ビタミンA欠乏症の子どもの死亡率は通常にくらべ、30%も高くなっています。また、ビタミンA欠乏は妊産婦の死亡率とも深い関係があります。さらに、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染している母親がビタミンA欠乏症であれば、赤ちゃんにウイルスが感染する危険が高くなることも分かっています。

驚くべきビタミンAの効用

ビタミンAの効用はさまざまな場面で証明されています。

子どもに定期的※に高単位のビタミンAを与えると…

- 失明やその他の目の疾患を90%なくせる
- 死亡率を23%引き下げる（5歳未満児）
- はしかによる子どもの死亡率を大幅に下げる（半減も可能）
- 亜鉛と一緒にビタミンAを補給するとマラリアに対する自然の抵抗力を高める

（※現在、6ヶ月に一度の割合で補給されています。）

©UNICEF/94-0756/Nicole Toutounji

妊産婦にビタミンAを定期的に補給すると…

- 妊娠中や出産後3ヶ月間の死亡数が30～50%近く減る
- 夜盲症にかかる割合が低下する
- 胎内や母乳からの乳児へのHIV感染率が低下する
- 寄生虫の駆除を一緒に行うことで貧血症が大幅に減る

ユニセフの取り組みと国々の前進

ユニセフは1993年から1996年にかけて約5億個の高単位のビタミンAカプセルを136カ国に配布しました。(現在も配布は続いています。)カプセルは1個あたり2セント、つまり、100円で約16人の子どもの1年分のビタミンAを調達することができます。

さらに、多くの国で菜園づくりや食品の保存の工夫などによって家庭の食事を改善する努力がなされています。育苗所を設けて苗や種を安く手に入れられるようにするのもそのひとつです。

また、ビタミンAを強化した砂糖や小麦粉、マーガリンの普及も試みられています。グアテマラでは1970年代半ばから砂糖にビタミンAを添加してきましたが、1980年代に内戦が発生したにも関わらず、1990年の調査では砂糖の強化が子どもを相変わらずビタミンA欠乏症から守っていることがわかりました。ビタミンA強化砂糖は現地にしっかりと根付いていたのです。